かながわ

42
麻生区文化協会会報

絵と文・佐藤勝昭

岡上東光院を描く

鶴川駅から南東に五百メートルほどのところに岡上山宝積寺・東光院というお寺があります。山門は朱塗りで、両側に仁王像があり、階上には阿弥陀三尊と閻魔大王をはじめ十王の像が安置されているそうです。山門をくぐると、正面には川崎市内では最大という本堂が見えます。伝説では奈良時代に行基という僧侶が岡の上に仏像を見つけ東向きにお寺を建てたということですが、実際には平安から鎌倉期ではないかということです。

この絵はある年の春、麻生区美術家協会主催の区民スケッチ会で指導の合間に描いたものです。参加者は、緑豊かでツツジの美しい境内で画用紙に向かい楽しいひとときを過ごしました。

（この文は、高橋嘉彦著「ふるさと川崎の自然と歴史」を参考にしました。）

上を向いて歩こう

副会長　笠原恒子

当文化協会創設時から興味津々であったが、主人の仕事が忙しすぎるので様子を見ているうちに五年の歳月が流れた。五周年行事が地方紙などで報じられてからの入会である。その間、アンテナを向けていたつもりだが、外部からは何をやっているのかアンテナが悪くてよく解らなかった。

次の十周年記念式典は一会員として、雲の上のことと参加しなかった。十五周年の時は総務として、二十周年では会計として役員の立場で、又企画・実行委員として係わったので、会員の皆さんの積極的参加を切望したものだ。立場が変らないと見えてこないものだ。

この団体は主に専門家集団であり、ボランティア団体なのだ。市から助成金を頂きながら、文化祭に出演するだけで終始してはなるまい。私の入会前の五年間はこの発信を待っていたように思う。

麻生区民が、川崎市民が、麻生区文化協会に期待するものは何か。いつも問い続けて行く必要がある。

十五周年にかかげた「ひびけ麻生の空へ　伝えよう創ろうふるさとの文化」が、その後大きく引き継がれて、二十周年行事の成功につながった。自分達の力だけで舞台を作りあげた。演出をした丸山博子さんの力量に感じ入り、出演した各位の技量に感動したものだ。そして裏方が一丸となって作り出した舞台であった。まさに会員の心が一つに結ばれて開花した。

凌雲書展出品作の前で

麻生の里に生まれ育った子ども達が、麻生の里を胸を張って「ふるさと」と呼んでくれるか。呼んで欲しい。だから私達は何かを子ども達に伝えたい。そんな思いで皆それぞれに力を発揮した。実にさわやかな文化祭であった。

私達がそれぞれの持ち味を活かして外にむかった時何ができるか。そのあたりに新しい文化協会の姿を想像するのである。

「第四回あさお古風七草粥の会」も成功裡に終り、麻生の行事として定着しつつあるが、これとてもイベントになってはいけない。昔の麻生の地に想いを馳せ、今の麻生との融合を図りたい。

昨年、区の委嘱で当文化協会が編集した「ふるさと麻生」を広く一般区民に読んでもらえるよう再版を働きかけたい。古きを温めて新しきを知る、個の時代となった今こそ、忘れられてしまった昔の人の知恵や生活を、ずっしりと胸に深く受けとめ、人間としての尊厳や誇りを自覚したい。低中学年向けの本ではあるが、大人が読めば、そんな想いにもかられる本である。

予算の関係で、学校活用を重んじ、文化協会員の目に触れることもなく区内小・中学校への配布となったが、配った後の活用状況などまったく不明であり、図書室に置かれていても、先生方の積極的な活用に期待するしかない。

先日、図書館講座「郷土史　百合丘周辺の移り変わり」（講師　高橋清行氏）に参加した折、この「ふるさと麻生」が本屋に置いてないが、どうしたら手に入るのか聞かれて困った。何人かの人が「そうだ、そうだ」と言っておられた。

ところで四月にオープンの「麻生市民交流館やまゆり」。昭和音大移転にともなって、文化協会から一名と要請されて三年間前向きに係わってきた市民利用施設の誕生である。俳句大会実行委員会の折、皆さんにご相談した記憶があるが、「サロンを作りたい」という私の意見に、水上先輩が「藤田会長の作りたかったのがそれだ」と力強く後押ししてくれたものだ。

しかし、いざ一人歩きを始めた「やまゆり」の運営はその収入源と相いまって大変なご苦労があろうと心配している。皆さんの積極的参加を期待して止まない。オープン記念の作品展には当文化協会美術工芸部の若手有志が出品する。

和太鼓に掛ける願い

菅原陽子

和太鼓の響きやリズムは私達に「人の心」を呼び起こしてくれます。それはなぜなのでしょうか。打つ人の心や技術によるのはもちろんですが、太鼓自体が樹木や動物の命を頂いてできているからかもしれません。

その昔、麻生区片平の山地は「夏蒐岡（なつかりおか）」、低湿地は「夏蒐谷（なつかりやと）」と呼ばれていたそうです。「夏蒐太鼓（なつかりだいこ）」は、土地の人に可愛がられ、土地の人たちが集まって楽しむことができる太鼓グループに育つようにと名付け、はや、三十年を迎えようとしています。

人間は生活している限り、年齢に関わらず、気持ちを切り替えたい、身体を思い切り動かしたい、ストレスを解消したい、内に貯まったエネルギーを昇華したい、という時があります。それらを解決するプラスの方法の一つとして、太鼓を打つ楽しさとそのマナーを味わってほしい、そして、青少年たちには、太鼓の活動を通して地元の行事や祭りに参加してほしい、また、自己発見の場を持ってほしい……。私が太鼓を始めた意図はこういうところにありました。

今、世間には様々な和太鼓グループがあります。その多くは、有名な曲の伝承にのみ力を注いでいたり、ある作品を講習会で学んでそれを再現するのみであったり、盆踊りの曲に合わせて太鼓を打つのが主であったりします。

太鼓をたたくようになって家族との会話が増えました

どれも意義ある活動ですが、夏蒐太鼓では地元、川崎市麻生区の歴史を生かした曲を創り、演奏することにこだわっています。それは、歴史を生み出した人々の、目に見えない「背景」を私達なりに動きや音に表したい、という気持ちからです。文化は人間の生活そのものであり、人とともに変化するものです。古いものを伝えることも大事。新しいものを創り出すことも大事。双方のバランスが大切なのではないでしょうか。

夏蒐太鼓では太鼓を打つことと同等、あるいはそれ以上に大切にしていることがあります。それは「人とのかかわり」です。忙しい今は、たとえ、親子、夫婦、兄弟、姉妹、家族であっても、心ならずも、ゆっくりふれ合う、しっかり向き合う時間を持てずにいるのが現状のようです。また地域コミュニケーションの不足に伴い、年齢を超え、共通の目標を持って活動する機会も減り、特に子供が親・家族以外の人から苦言をもらえるようなことが少なくなってきています。夏蒐太鼓の日常活動（練習、発表、準備、後片づけ、話し合い）は、それらの問題に、かなり応えているように考えられます。「自分のできることで、無理なく、地域への還元、社会への還元を」とはよく言われていることですが、私もできる範囲で地域や社会との繋がりを持ち続けようと思います。

近年、しきりに想うことをひとつ披露しておきましょう。それは太鼓にラバーを被せずに生の音で練習できる場所が欲しいということです。叶えられるでしょうか。

“みんなが家族”のような交流をしています

はいくの日（八月十九日）生れ笠原古畦
―地生えの俳誌「さざなみ」五百号と句碑村づくり―

馬場 身江子

平成十八年十二月五日、寒満月の夜巨星が落つるが如く先生は身罷られた。八十八歳。

笠原古畦師は、俳誌「さざなみ」の主宰であり麻生区文化協会の専門委員である。葬送の日は、くしくも太平洋戦争開戦日の十二月八日であった。

師笠原古畦は本名を盛（せい）といい大正七年八月十九日（はいくの日）に高石の地に八人兄姉弟の三男として生を受けた。十三歳で地元の宗匠の門に入り俳句を始めている。昭和十三年愛国心の強い母の勧めで海軍に志願し、十二月八日の真珠湾開戦に軍艦比叡に乗り組み兵役に服した。少佐大條楚水の下で俳誌「浪」の編集係を勤めた。「俳句のおかげで少佐に可愛がられ楽をさせてもらった」と語っている。

平成８年11月18日、自宅裏に師である石川桂郎の句碑を建立した。この写真は句碑を礎石に乗せる前のもの。

本稿を書いている私は、師のお側に仕えた一番古い弟子として師の俳句にかける情熱と石川桂郎に対する師恋と母恋又弟子への愛を目の当りにして育てていただき感謝でいっぱいである。

地生えの俳句

渡辺華山の逸話に「俳句が作れたので一夜の宿を手厚くもてなされた」という、この麻生の地は俳句に古い歴史があり盛んであった。創始者は明治の終り頃当地の分教所の先生の双渓亭漣月宗匠である。青少年の非行防止と育成の為の句会を開き、そこで古畦師の句作りが始まった。十三歳であった。手抜のない本格的な俳句修業であり結婚・新築・長寿等の村の祝い事などには大会が催され地域との繋がりを大事にしていた。こうして芽生えた句会も太平洋戦争が始まり、習い覚えたばかりの若者達も次々と徴兵にとられ、指導者達も帰らぬ人となった。

戦後戦地から帰れた仲間に呼びかけて困難と思われた句会を復興する事が出来た。疎開で東京から逃れて来た俳人達もおり、その中に終生古畦師が師と仰ぐ石川桂郎がいた。桂郎主宰の「風土」に連なって薫陶を受けある一定の水準の作を生み出す「さざなみ」の結社としての存続が出来上がった。

俳句の普及

ゆりストアを母体として師のもう一つの顔はゆりストア専務の顔である、次々と開店する事業の担い手として多忙を極めていた。

昭和五十七年笠原湖舟氏より主宰を任されてより積極的に講座を持ち、初心者への指導と俳句の普及に務めている。ゆりストアを母体に店頭にも俳誌を無料で置きその読者から会員になる方も多く出た。ストアの従業員が出身校の教材として高校に俳誌を贈り俳人の多い社風として求人活動にも役立った。これを通して山形の羽黒にも支部が生れ、校長先生を中心にした新潟の句会や所沢や伊東の支部が誕生し、地域に基盤を置く結社としては屈指の規模となった。

昭和の後半から平成へと俳句ブ

俳誌「さざなみ」の表紙

ームに乗って「さざなみ」も全盛期、主宰も麻生区の文化センターやヨネッティ、福祉センターの講師に招かれ俳句の手解きに精力的に活動した。句会も多数生れ、例会、水曜会に加え木曜会、弥生会、親畦会、畦の子会、金曜会、若葉会、如月会と柿の花句会も加わり、十の句会が毎月開かれ研鑽に励んでいる。俳誌「さざなみ」も七百冊を発送し会員も六百名の大世帯となった。会員の中から句集の出版も相次いで、出版祝賀の会も盛大に行われた。

高石神社に句碑村建立

平成元年、奥の細道三百年に併せて芭蕉の句碑が建立され高石神社句碑村が整った。

湖舟・古畦両主宰の悲願が実現し神社本庁からも感謝状を受けた。句碑には俳祖の荒木田宗武、俳聖松尾芭蕉、「さざなみ」の創始者以来の句や日比野桃旭、高浜虚子、石田波郷、石川桂郎、八幡城太郎、岸風三楼と著名人の句碑も刻まれ麻生区の名所百選にも選ばれている。現在五十一基が整い、近郷より尋ねる者が後をたたない盛況さである。

思えば思われる

古畦師の偉業は数えきれないのだが、特筆すべきは全川崎俳句連盟の設立、麻生区文化協会の俳句講座や俳句大会の基礎作り等の文化の継承と普及、そしてなによりも真似の出来ない事は、石川桂郎師恋の句碑を十基建立した事だと思われる。場所の交渉や石の選定から刻む句選びや運搬、除幕式とそれはそれは心血と私財を注がれた事だろう。「思えば思われる」の理の如く、古畦句碑三基が弟子達により建立された。師の菩提寺の法雲寺には「からすうり」の句碑が桂郎句碑と語らうように座っている。羽黒の碑の杜には「花擬宝珠」の句碑が師の体躯の如く威風堂々と建てられ、最近では黒川の坂の上の句碑の苑に「空蝉」の句碑が建立された。

平成九年編集室をゆりストア本店の二階に移す頃より師の体調がおもわしくなく各句会への御指導もなくなり淋しい年月であった。それより十年余り師の不在のどの句会も吟月顧問の指導のおかげで主宰古畦師の意志を継いで「楽しい句会をいたしましょう」と師の席に師が居られる如く皆集って研鑽を積んだ。月刊「さざなみ」も五百十四号となる。

一度の休刊もなく続けてこられたのは、古畦師の人柄や俳句への熱い思いに連なり、深い絆で結ばれた「さざなみ」衆の献身的な努力と一致団結の友情に支えられての事と思われる。麻生区文化協会の俳句講座、俳句大会も師が始めてより今年で十九回を重ねて来た。実行委員長のお役も代々「さざなみ」会員が引継で頑張っている。

多くの人が俳句好きになり楽しい句会や人の和が生れるよう、師の奉仕の精神を受継ぎ文化の継承を実践している。平成十八年十二月五日、激動の昭和を俳句を拠とし俳句の楽しさを伝え切った安らかな八十八歳の旅立であった。

笠原古畦の句集出版、「朶来」「師恋」「羽黒詣」「武蔵野抄」「自註笠原古畦」「奉仕」

「奉仕」出版記念・左は執筆者（平成５年８月）

初みくじ母には見せて結はへけり
豊年の畦丹念に刈られけり　（句碑高石神社）
黄泉の師と酒酌み交はす菊の宴
はや固き寒餅にして切らさるる
烏瓜竹のそよくは鳴るごとし　（句碑高石法雲寺）
妻の寝て子が寝て虫に親しめり
大前に去年今年なく奉仕せり
置く箸にとんぼの止まる芋煮会
空蝉のしっかと掴むおかめ笹　（句碑黒川句碑の苑）
ありがたや出羽の宮の花擬宝珠　（句碑羽黒山碑の杜）

平成十八年度

第十八回　麻生区文化協会俳句大会

実行委員長　馬場身江子

川崎市長賞
球審の身振り大きく雲の峰　加宮　由登

川崎市議会議長賞
甚平や捕虜で覚えし露語ひとつ　篠田きく江

川崎市教育委員会賞
老の笛村を育てし秋祭　白井　克恵

川崎市麻生区長賞
十八で志願十九の墓あらふ　小井戸直会

麻生市民館長賞
涛がらの飛沫おさえて浴衣裁つ　馬場身江子

川崎市総合文化団体連絡会理事長賞
六月の田水明りに母郷かな　森　かつじ

川崎市俳句連盟会長賞
毛虫焼くもとより優しい女です　禅野　孝一

麻生区文化協会会長賞
過ぎて来し道に悔なし夕端居　山田ミツエ

俳句大会当日優秀句

席題「石・戸」読込み

古民家の大戸の重し秋桜　石川みほ子
赤とんぼ頬に遊ばす石地蔵　池内　英夫
石文字の女工哀史や湖水澄む　小井戸直会
懐石の〆は伊万里のむかご飯　山元志津香
菊人形百万石の加賀日和　鴨志田杜灯
爽やかや流れついたる石の貌　石田　時次
水切って飛びゆく石や秋の川　田中　清子
裏木戸をあけて届きぬ零余子飯　杉本　好子
夕もみじ芭蕉の句碑は石一つ　石川　典子
戸隠や新蕎麦晒す懸樋水　鈴木ゆたか
母寝まるまでの月の戸引かず置く　市川　紫苑
ごんごんと石碑を刻む良夜かな　吉田　功
石庭に無念夢想や秋の声　岡本　剛一
薬石の効を奏づやちろろ虫　藤田　皓
飛び石の尽きたる所石蹐の花　原　炉風
石畳踏みて古道の初紅葉　川嶋　正子
秋時雨ふみ石をゆく杖の音　天正のぶ子
小春日の日の斑を散らす石畳　笹本落葉子
石窟や飛天の裳裾そぞろ寒　内田　香晴
石据えて新居落ちつく秋の庭　久保倉和美

平成十八年度

俳句講座点描

吉沢　篁村

第一回　八月二十二日
第二回　八月二十九日
第三回　九月　五日

今年も俳句講座は三回開催致しました。馬場身江子氏の名司会で会はなごやかに盛りあがりました。

第一回目は「青芝」主宰の中村菊一郎先生で、弁舌さわやかであり会場は熱気に包まれ大盛況でした。

演題は「俳句における比喩」でした。俳句の比喩そして直喩・隠喩・活喩（擬人法）＝風は草木にささやいた…。八種類の例を事細に説明され、俳句の真髄に触れる思いで大変勉強になりました。

比喩を用いた俳句

降る雪や玉のごとくにランプ拭く　蛇笏
金剛の露ひとつぶや石の上　茅舎
降る雪が父子に言をもたらしぬ　楸邨

第二回目は「麦の会」会長の橋爪鶴磨先生の「俳句の鑑賞ということ」

「鑑賞」と「批評」を並べた場合鑑賞は批評ほど責任感を感じないですむ、鑑賞は「自己中心性」によるものであると。金子兜太の句梅咲いて庭中に青鮫が来ている

梅の花に「サメ」という意外なものを配することによって伝統的な美意識にゆさぶりをかけました（中略）自由な想像を楽しみながら作品を享受すればよいのです。

鑑賞にあたっては、①作者の位置に立つ、②情景を再現する、③作者の思いを汲み取る、④背後の世界を推察する、⑤言葉の操作を考える。

また先生は、昨年の麻生区俳句大会の句を鑑賞して下さいました。

客人にされてふるさと夏祭り　前田博子
貧しさは語らぬ母なり一葉忌　吉澤篁村
記憶より細き旧道鬼やんま　田宮玉歩
老夫婦団扇ひとつを隔て寝る　池内英夫

鑑賞文は（紙面の都合により略）

第三回目は（さざなみ同人）山岸吟月先生でした。吟月先生は一句評の前に、俳句について伝統と歴史等俳祖荒木田守武、そして俳聖松尾芭蕉について、更に正岡子規より、高浜虚子から現代まで心のこもった新鮮味のある講義に心から感謝いたします。また投句について丁寧に一本筋の通った批評に熱意をこめて説明されました。

原句　命令す犬を家来に夏休み
評　愛犬を家来となして夏休み

あさお文化サロン「食文化を考える」

当会の文化サロン部は、今年度で発足十周年を迎え、「食文化を考える」をテーマに活発な活動をしている。

昨年九月二十六日には「麻生に伝わる食文化を語り、味わう会」が、続いて三月二日には「食の安全・今どうなっている!?」という演題で講演会が開かれた。

手作りのすいとんを味わいながら「麻生に伝わる食文化を語る」

九月二十六日は、雨の降りしきる中、黒川青少年野外活動センターに二十五名の参加者が集まった。

講師には地元黒川に畑をもつ吉沢伊佐夫氏を迎えた。

昭和の戦中戦後の代用食であった「すいとん」を、担当のグループが吉沢講師の畑でとれた野菜を使って作った。

参加者は、すいとんと、地元の漬物、ふかし芋を味わいながら、当時の食事情や麻生区の農業の習慣などを吉沢講師から聞いた。

当時の代用食とはいえ、すいとんは、実はバランスのとれた健康食だったのではないかという話や、今も麻生という土地（吉沢講師の畑）でとれた野菜で手作りできる伝統食でもあることに参加者はうなずいていた。

さらに多摩の里山のビデオも紹介された。黒川駅からの道端に咲く野の花やススキが飾られたテーブルに、素朴で気の和む地元ならではの催しだと喜ばれた。

あさお文化講演会 ～神山美智子先生を迎えて～「食の安全・今どうなっている!?」

三月二日、麻生市民館大会議室で「あさお文化講演会」が開かれた。講師は、食の安全に詳しい弁護士の神山美智子先生。

神山先生は、食の安全・監視市民委員会代表でもあり、「食の安全と企業倫理」ほか環境や食品の安全に関する著作がある。

私たちは、毎日の食事や健康について、どう気をつけたらよいのか、現状の報告をもとに具体例をあげてお話をしていただいた。

食品の安全については、実は問題だらけである。BSE問題・カドミウム、水銀、PCB、ダイオキシンによる汚染などは実態として全く解決されていない。

私たちが取り返しのつかない被害に遭わないためにどうしたらよいのかを真剣に考える必要がある。

一九六八年に発生したカネミ油症事件により大量のダイオキシンを口にし、四十年間治らない全身病として被害を受けた人々が、救済を受けられない現実がある。食品被害には、薬害・公害・難病とちがって社会的支援や国家による補償がないという問題がある。

健康食品と呼ばれるものにいちばん被害が多く、消費者はテレビなどマスコミ報道に振りまわされないよう気をつけることが大事である。これを食べていれば健康になれるとか、病気に効くとかいう健康食品はない。

薬害の補償について説明する神山講師

二〇〇三年にできた食品安全基本法は「国民の健康保護が最も重要」と宣言したもので、それまでわが国は、国民の立場に立たなかった。これは、国民の意見を考慮してできた基本法である。

私たちが無関心でいることの恐ろしさを考えなければならない。

マスコミが報道しないことが、実は多くあることを私たちは知るべきで、無関心が食の安全をそこなうことになる。私たち消費者には、団体を通して国に意見を言っていくという行動が必要であるということでお話はむすばれた。

来場者には、その第一歩としての「食の安全・監視市民委員会」への賛同を募られた。

平日にもかかわらず、来場者は八十名をかぞえ、みんな真剣な表情で講演を聞いていた。

終了後の懇親会では、「できれば若いお母さんたちにも多く聞いて欲しかった。PTAで今後取り上げてくれるといいですね」との感想が出た。

（松田洋子）

上麻生の"ロマン"を訪ねて 三月十七日

―小島一也先生を講師に迎えて―

佐藤 英行

第三十二回雑学教室は総勢五十二名という多数の出席者で、柿生駅を九時に出発。あいにくの小雪舞う寒さの中でどうなるかと心配でしたが、「思い出の丘」までの百二十七段の石段を登りきるころには春の陽気に回復。臼井義胤頌徳碑を前に先人の功績を敬いつつ中学校の脇を通り「おっ越山公園」に向かう。お椀を伏せたような丘の上からの東西の眺望は開発の進む住宅街で、驚くばかり。芽吹いたばかりの紫陽花の小道を進み「秋葉神社」と「浄慶寺」（あじさい寺）では傾景の庭を散策。山菜黄、山桜の香りを楽しむことが出来ました。尾根道を通り抜けると、今では想像もつかない「亀井城跡」に出る。現在は住宅が建ち並び何も残っていません。「麻生不動尊」は火伏せにご利益があり、近年はだるま市で有名です。今年の一月二十八日の初不動では八万の参詣者、四百軒もの露天商で賑わったそうです。裏坂を登り「月読神社」での昼食となる。社務所で小島先生から「亀井城（館）の調査によると、源義経の四天王の一人、亀井六郎重清の城（館）が在ったと伝承される処」だとうかがう。未だ多くの謎のあるロマン溢れる貴重な話を聞くことが出来ました。

妙福寺門前にて記念撮影

午後は、昭和四十八年から四年かけて造成した「恩廻公園」へ。ここは真福寺川と麻生川が合流し谷本川に流れ込む地点にあたります。町田市に入り斉藤順三郎の墓に立寄り、最後の妙福寺に到着。明徳二年（一三九一年）に創建された由緒あるお寺です。境内の祖師堂、鐘楼門の文化財を見学。春とロマンを満喫した一日でした。

第23回 かわさき市民芸術祭

川崎市総合文化団体連絡会主催のかわさき市民芸術祭が、今年も春の訪れとともに開催された。

今年の舞台芸能部門舞踊は三月四日、高津市民館大ホールで披露され、「桜絵巻～移りゆく花の宴～」と題され、八団体が参加した。

時代の流れにそった現代までの舞台。どの団体も美しく華やかな舞を見せた。

麻生区文化協会では「琉舞の会」（関りえ子代表）の二十二名が沖縄舞踊「花かざり」を舞い、プログラムのトリを飾った。

花笠と紅型のきものという衣装は、目の覚めるような美しさ、華やかさである。

「桜絵巻」は文字どおり桜一色。一足早い満開の花見であった。

美術部門の芸術祭は、三月七日から十一日までの期間、例年どおり「アートガーデン・かわさき」を会場に開催された。

各区での市民芸術活動を一堂に見渡せる催しであり、川崎の市民文化活動を知る機会でもある。

当会からは、絵画・書・詩歌・工芸の部門合わせて十六名が参加した。

携わった実行委員はじめ担当者・会員のみなさま、おつかれさまでした。

（松田洋子）

編集後記

▼「からむし」の巻頭頁は、四十号から、会員の描いたスケッチとそれにちなんだ文を掲載している。本号は、会員になられたばかりの佐藤勝昭さんにお願いした。佐藤さんは美術工芸部と広報部に所属。▼他の部会と重なっても部員になれる広報部。現在、広報部に不在のアカデミー部・舞台芸能部・文化サロン部のみなさま、部員になりませんか？（松田記）

松田洋子・関森田鶴子・山田芙美子
田口正太郎・千坂隆男・橋本周
佐藤勝昭

麻生区文化協会会報
からむし　第四十二号
平成十九年三月三十一日発行
発行人　麻生区文化協会
会長　京　利幸
編　集　麻生区文化協会
広報部
川崎市麻生区万福寺一―五―二
麻生文化センター内
☎　〇四四―九五一―一三〇〇